

法政就業力通信

～今月のさんぽ道～

法政大学

産学連携 3D 教育プロジェクト
<http://3dep.hosei.ac.jp/>産学連携 **3D** 教育プロジェクト

学生を動かす言葉たち

特任教員 鈴木 美伸 (すずき よしのぶ)

新緑が輝き、新入生も大学に馴染んできた頃です。授業で見ていると、良い意味で落ち着いて来た学生と、悪い意味で弛んできた学生とが目につきます。新入生がこの時期に身につける習慣(行動パターン)は、その後の人生を左右するものであり、それを良い方向にもっていくのは重要な教員の役割です。

とはいうものの、イマドキの学生の習慣を変えるのは、至難の業ですね。企業研修においては、業務命令という伝家の宝刀がありました。大学では学生の頭と心に訴えかけて自発的に変化して貰わないと意味がありません。毎日試行錯誤の連続ですが、これまで学生に響いた言葉をいくつかご紹介いたします。

「人見知りは性格ではない」

最近、本当に多いのは「私は人見知りな性格なので・・・」とグループ・ディスカッションでもなかなか発言をしない学生たちです。そんな学生に、この言葉は驚きをもって受け止められます。人見知りで生まれてきた赤児が皆無のように、それは単なるコミュニケーションの経験不足に過ぎません。

「性格は行動の結果である」

学生が性格だと考える背景には、変えられないもの、仕方がないもの、と思いつくことによって、無意識に面倒な努力を避けていることがあります。そこで、「性格をすぐに変えるのは困難だが、行動なら一瞬で変えることができる。試しに(いつも)最後方に座っている学生は、今日だけ最前列に来なさい」と話し、座席移動をさせてみると、学生自身が授業の聞こえ方の変化に驚きます。

「悲観は気分、楽観は意志」

フランスの哲学者アランの有名な言葉ですが、この言葉も学生に響きます。人間は生物的に弱い(日本では20歳になっても独り立ちしない)から、悲観的になるのが当たり前のことで、ネクラなどではない。だからこそ、楽観的に未来を考えるのは、人間が生きるために必要な能力であり、意志である、と話します。企業採用担当者が評価するのも、ネアカな性格ではなく行動(能力)です。

これらの言葉は、本来であれば大学での読書や教養の学習を通じて自ら悩み、発見していくべきものでしょう。しかし、高度情報化(高度コピペ化?)時代のいま、学生は思索に耽る間もなく情報の洪水に巻き込まれています。それは、ある意味楽な生き方なのでしょうが、法政に来た限りは、惰性を習慣とせず、その先の自分を創る習慣をいち早く身につけさせたいものです。

略歴

84年成城大学法学部卒。

日米ハイテク企業での営業・人事を経て人事コンサルタントとして独立。キャリアカウンセラー資格取得後は多くの大学でキャリア論の講師を務める。

e-mail:

ysuzuki@stage41.com

yoshinobu.suzuki.88@hosei.ac.jp

研究室は新見附校舎2F

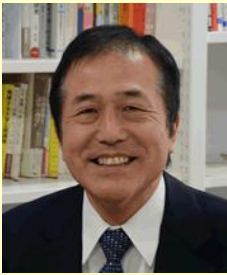


略歴 84年名古屋大学大学院卒。京都大学博士(経済学)。84～89年京都大学経済研究所助手。90～97年滋賀大学経済学部助教授・教授。97年～03年法政大学経営学部教授、04年～IM研究科教授。

良好な人間関係は効率重視では築けない

教授 藤村 博之 (ふじむら ひろゆき プロジェクトリーダー)

トヨタグループに属する部品会社で、ある部長が「毎日13時から15時は同一部署内のメール禁止」を決断した。理由は、部内のコミュニケーションが悪くなっている状況を改善したいというものであった。最初、部員からは多くの不満が出された。「メールという便利な道具を禁止するとは何事だ」「部長は仕事の実態がわかっていない」など不満が続出した◆しかし、上司の命令である以上、従わざるを得ない。用事がある人は、メールを送る代わりに、その人に会って話をするようになった。すると、部内のコミュニケーションが格段に良くなったのである◆顔を見て話すことによって様々な付帯情報を得ることができるようになり、仕事の効率が上がったという。メールは確かに便利な道具だ。しかし、使い方を選ばないとかえって効率を落としてしまう。良好な人間関係を築くには、時間と労力をかけることも必要だ。もう一度、会って話をすることの意義を見直したい。



略歴 法政大学大学院経営学研究科キャリアデザイン学専攻(修士)卒業後、法政大学大学院政策創造研究科博士後期課程に進学。2011年3月、同博士課程中退。

学生時代の大事な人生の岐路

特任教員 有田 五郎 (ありた ごろう)

長い人生の道のりでも誰もが、そしていくつになっても人生の岐路に立たされる。それらに対して一つずつ前向きに乗り越えてこそ充実した人生を過ごすことができる。授業の中で、「生まれてから大学卒業までの間で大切な岐路を考えよう」と学生達に問い掛ける。皆は高校時代の大学受験と大学時代の就職活動と答える。その通りだ。そしてもう一つが実は最も大切だと説明している。それは大学一年のこの時期をどう過ごすかだ。新入生として4月ひと月を過ごして、大学や周りの様子が分かり各自が自分なりの生活パターンを確立する時期だ。ここで大学4年間をどう過ごすかの目的を定めて、自分を律する姿勢を身に付けることが肝要だ。どころが、毎年この時期に自分を甘やかして脱落していく学生を見ている。非常に残念だし、もったいない。大学の教職員からこの実態を学生達に伝えて警鐘を鳴らして欲しい。授業をさぼる者・授業中マナーの悪い者・事務課での言葉遣いや態度、それらへ注意を与えることが彼らの気付きへとつながる。

大学生にとって我々は「いつとき現れる『点』」

学部事務課長 細田 泰博 (ほそだ やすひろ)

前号で平山課長が大学生の気質について触れた。私もこれに続けよう。

大学生と付き合い合うと、彼らは自分が接するコト・ヒトを『点』として捉えているように感じる。たとえば授業。よく出席する。出れば熱心に聴き理解もしている。だが「次までに考えておこう」はムリ。宿題は困る。終われば次の時間は別のコトに使うもの。切り替えが早いというのか、彼らの時間に『線』や『面』とならずずっと意識され続けるのは難しい。

ストレス過多の現代では、悩みを持続させない方がいいのだろう。でも悩みなり何なり一旦自分のものとしないと、解決策を見つけても自分のチカラにはならない。だから同じことを何度も訊かないとならなくなる。切り替えの早い人生は、カラフルでにぎやかだが借り物ばかりで、自分はやせっぽちのままである、とは言いすぎか。

ただし学生と付き合い合うには、単にそれを批判するのではなく、なぜ彼らがそんなにも「悩み続ける」ことを忌避するのかを、彼らの身になって考える必要がある。これが目下、私が悩み続け、考え続けている『線』であり『面』だ。



**法政大学社会学部社会学科卒。
学務部学部事務課長**

◆ 企画販売店舗の事業運営インターンシップ進捗状況

4月末に行われた全体ミーティングでは、事業経営と商品・在庫管理手法に関するワークショップで、企業経営を考えよう(費用編)・「仕入戦略を考えよう」をテーマに意見交換を行いました。その後、担当業務を決め、事業計画を作成し、6月中旬より各大学チーム(法政・昭和女子・明治学院・青山学院)が順番に、学内のスペースにて週替わりで販売を行うことが決まりました。先日、販売職を専門とする人材派遣会社にて販売研修が実施され、挨拶のマナー・販売実務など、販売の基本から応用まで、実技を中心にトレーニングが行われました。学生のうちにコミュニケーションスキルを向上させておくのはとても重要です。販売といえば、「働く場面を実感させるオリジナル教材DVD」シリーズⅦ「百貨店編」も販売の仕事の題材にしています。

◆ 編集後記：「点と線」は、言わずと知れた松本清張の推理小説で、「4分間の仮説」が有名なアリバイ崩しミステリーです。1958年発表で時代を超えて読み次がれる作品ですが、「スマホでサクッとルート検索」の今の若者はこの作品をどう読むのでしょうか。細田課長の「点と線」の話からふと連想しました。《事務局：平山》

法政大学 産学連携 3D教育プロジェクト (事務局：学務部教育支援課)

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL: 03-3264-9520 WEB: <http://3dep.hosei.ac.jp/>